

アウトリーチ等を通じた継続的支援の推進

これまで該当する相談窓口までいかないと、つながりにくかった“支援”

しかし、困りごとを抱える世帯が、「困っている」と発することや当事者自身が「何に困っている」と明らかにできないこともあり、適切な支援を受けられず、困りごとを抱えたまま自分らしく暮らすことができず、社会から孤立し、生活に窮する状況に陥る場合があります。

三田市が取り組むアウトリーチ等を通じた継続的支援では、「待つ」SOS から「掴む」SOS に、そして当事者の“つぶやき”、地域の“気づき”を支援へつなげるための取り組みをすすめています。

1. 地域の「気づき」を拾い上げる（アンテナ）



2. 困りごとを抱える本人や世帯につながる（アプローチ）



3. 「寄り添い・つなぐ」（伴走支援）



「身近な福祉の窓口」として、市内6か所に地域福祉支援室があり、地域福祉支援員が配置されています。支援員は、地域の活動支援を行うだけでなく、窓口での何気ない会話やまたサロンなどの地域の居場所や会議の参加など、日常の地域支援活動から聞こえる地域住民の「つぶやき」から潜在的な困りごともしっかりキャッチしています。

キャッチした“つぶやき”が支援へと直結しないことも多くあります。そのため、本人が相談に来るのをただ“待つ”のではなく、地域の方々と変化に気づける見守りの輪を育んだり、必要に応じて訪問するなどのアプローチを行っています。

伴走支援は、ずっと横について動くことではありません。当事者や世帯に寄り添い、対話を重ね、信頼関係を構築し、当事者の“真の声”を聞き、社会的孤立状態からの回復や「主体的な」生活者としての社会参加に向け、専門機関や専門職そして地域の支援者につないでいます。

【事例1】

母親が入所し、50代ひきこもりの息子がいると近隣の方からの相談を受け訪問。収入がないことから、食事を欠く状態にあった。そのような状態でも、本人は専門機関への相談に拒否を示していた。支援員は、一時的な食支援を行いながら、本人が「自分で暮らす」ことのイメージを描くことに寄り添うことで、相談窓口を訪れることができ、支援へつながった。

【事例2】

地域の会義に参加したところ「何度も訪ねてきて、ゴミ回収日を繰り返し聞くのに間違えるから困っている」「地域包括支援センターに相談にいったが、『まだお若く、介護保険の対象ではないから』と言われた」という話が出ていた。その話からは、介護保険の年齢ではないものの認知症のような状態が伺えた。地域の方と繰り返し訪問することで、本人の生活状況を詳しく聞くことができ、ゴミだけではなく、多くの困りごとがあることがわかってきた。また、随時包括支援センターへ情報提供を行い、訪問を働き掛け続けたことで、同行訪問することができ、医療受診や制度申請に向けた手続きが進んだ。